

## 歴史と環境：歴史地理学の可能性を探る

溝口, 常俊  
名古屋大学大学院環境学研究科：教授

阿部, 康久  
九州大学大学院比較社会文化研究院社会情報部門：准教授

<https://hdl.handle.net/2324/1398514>

---

出版情報：2012-12-20. 花書院  
バージョン：  
権利関係：

## 第15章

### 「地域環境史」構想

溝 口 常 俊

#### I. はじめに

「歴史と環境」という本書のタイトルを、筆者なりに解釈して考えている構想が「地域環境史」である。

自然と人間に関わる身近な問題を取りあげ、それを平易に語ることから出発し、両者の関係を重視する。日本には山があり、平野があり、川があり、海がある。そこで人々はいかなる生活をしてきたか、その実態を、歴史資料の発掘、フィールドワーク、ライフヒストリーをもとに明らかにする。さらに、自然と人間の対立と調和という視点で、開発史、災害史を学び、その知恵を21世紀社会へと活かしていきたい。

地域環境史を語る際に、以下の諸点に留意している。①従来の市町村史での気候、地形、植生…といった純粹概説的記載はやめる。②行政区分ごとの記載はやめる。「東三河の自然」とか「尾張の自然」というような地区区分ではなく、「半島の自然」として渥美半島、知多半島、あるいは西浦半島を一挙に論ずる。自然をベースに語るにはこの方がわかりやすい。③歴史時代区分的構成はやめる。古代から始まって現代に至るといったオーソドックスなスタイルから脱する。④いかなる自然のもとに人間の生活が営まれてきたかを学び将来に活かす。⑤小・中学生が読みたくくなるような、親しみやすい、イメージしやすい書物にする。しかし、思想と内容は高度なものにして、研究者にも満足できるものにする。

構成案の章建ては、第1部：自然環境と生活史、第2部：地域の葛藤、第3部：自然と人間の対立と調和、の3部構成で、その中に15章を設ける。

#### II. 「地域環境史」－自然環境と生活史－

構想中の第1部：自然環境と生活史では、第1章：山、第2章：川、第3

### 第3部 社会環境と経済活動

章：湖・沼，第4章：海・潟，第5章：島・半島，第6章：平野・台地，と地形別にそれぞれの自然基盤，物質世界，精神世界を語る。そして，まとめとしての第7章で，地域には1～6章で個別に述べてきた地形が複合的に存在していることを重視して「複合環境」を論ずる。

第1章：山，を例に挙げて，やや詳しく示すと，第1節：地形と気候，での地形については，専門的な地形分類にとられることなく，地形の違いにより人間の生活が異なるに注目する。たとえば，低湿地への乱開発に対する警鐘として，洪水地帯で50cmの高度差が生死を分けることを述べる。気候については，たとえば，山地斜面での日向（村）と日陰（村）では何が異なるのかを議論する。

第2節：動植物，での動物では，対象地域の動植物を網羅的に挙げるのではなく，あるいは絶滅危惧種を過剰にとりあげるのではなく，生活に密着した，例えば，害虫にもなれば食用にもなる蜂に注目するとか，鳥の声を取り上げたりする。これが，平野になれば，従来の市町村史では採り上げられなかったカラス，スズメなどがクローズアップされよう。植物，についても人間の生活に関連する植物・樹木を中心にとりあげる。

第3節：生業（物質世界）では，①衣，②食，③住，④遊に注目する。そして，第4節：信仰（精神世界）では，①神社，②寺院，③記念碑，④祭りを基本事項として押さえ，山の民のライフヒストリーを入れる。

ここで，具体的な山の民のライフヒストリーを「雲雀沢哀史」と題して紹介しておこう。調査地は長野県下伊那郡阿南町の雲雀沢集落，日時は2000年6月7日，インフォーマントはISさん（70歳前後）。

古文書の収集以上に，感涙したのは，江戸時代から続いた名主の大邸宅を女手1人で守り続けているISさんの心遣いと語りである。

飯田市千代村出身，5年間の新宿OL暮らしの後，見合で雲雀沢村のI家に嫁ぐ。大地主の舅，姑は相当厳しかったらしい。家を守らねばならない。その思いが強く，息子（ISさんの夫）を「守人」（役場勤め）と名付けたくらいである。毎日養蚕の仕事をした。冬も桑の土作りなど忙しかった。土日は休養なんていうのは夢の話で，舅とともに20町歩もある山仕事に追われる日々が続いた。下草蒔りのほかにY字型の一本梯子で木に登り枝打ちも行った。山の境界争いが絶えなく，遂に裁判沙汰になり，登記簿を厳密に調べた結果，裁判には勝ったものの，心労高じた夫は45歳の若さで亡くなってしまった。夫をなくした後も山仕事は続いた。いま木は労賃が高く付いて儲け

にならない。

番水も苦勞する。雲雀沢の上部落からは水を流してもらえず、よその村から樋を引いて入水している。今でもその溝さらいに出なければならぬ。休むわけにはいかない。舅の頭は山と水のことで頭がいっぱいだったという。そんな舅も亡くなった。

そのお葬式が終って2日もたたない日に花火が上がった。小作達がやっと解放されたという思いから打ち上げたいが、これには「いくらなんでも」と泣けてきたという。語るISさんの目には涙があふれ、止らない。今仲良くしている小作だったおじいさんが言うには「いまに見ている」という気持ちで暮していたという。そして8人も家族がいて羽振りがいい。こちらの落ちぶれた姿をみて内心喜んでいるという。

そんな人達と頭を低くしてつき合わなくてもと思うのだが、彼女自身は出自が地主の家でもなく、嫁いだ後も地主の嫁という気位は微塵もなく、誰とも気楽につき合ってきている。喧嘩でもしたら息子家族（近くにアパート住い）がいやな思いをするといけないし、という思いも強い。

以下、まむしに咬まれ命を落したまむし取りの名人の話、野生動物（はくびしん、猿、鹿、猪など）の畑あらし、髪の毛をきらう。でも髪の毛を燃すとまむしがくる、という話、よそ者を入れないという慣習が残っている、下條村は宅地造成が進んでいる、市民農園はいいけど、近くに来てほしくない、等々、話は続いた。

地主の嫁のライフヒストリーの聞き取りは、アンケート用紙を用意して聞き出すのではなく、相手の思うままに語っていただいた。その場に居合せた我々は、明るく涙して語る彼女の語りの重さに胸を打たれた。

この地域は、現在、中央日本で最もとり残された地域といえよう。Karen Wigenが言う periphery（辺境）である（Karen 1995）。でも彼女にいわせれば、その周辺地域こそが近代日本を造り上げてきたのである。日本の地域形成史を語る上で、いま我々はこの地域に光をあてるべきではなかろうか。

第2章の川と第3章の湖沼での節、項目の構成は「山」に準ずる。

ヨーロッパ人から見たら「滝」と称された日本の川、それは山と平野の世界を一瞬にして繋ぐ通路でもあったが、滝であるが故に、上流・下流、右岸・左岸それぞれの世界を分断する障壁でもあった。日本人はこの通路と障壁という川の持つ2面性を利用、克服し独自の文化を形成してきたといえよう。川に住む人、川を渡る人、そして川を作る人、それぞれの思いが列島の自然

に刻まれている。

川の民については、例えば、富山村村長から聞き取りした筏師について、彼らの多くは、稼いだ金は河川沿いの遊興地で散逸してしまったという。となれば当時の遊郭、女郎宿の分布を調べてみても面白かろう。

人体で川を血液に例えれば、心・肝など臓器に当たるのが湖沼である。近年、河口堰、ダムの建設によって人類は川と湖沼に新たな期待と挑戦をなしている。こうした状況下において、今こそ我々は、日本2000年の歴史の中で、命あるものが如何なる生活を営んできたか、そして如何なる生活を営んで行くべきか、を学び、思索せねばならない。2,3章で議論する「川と湖沼」の持つ意味は極めて大きく深い。

第4章の海・潟、第5章の島・半島は、日本人の居住環境として、どちらかと言えば見捨てられてきた地域である。こうした地域に注目してこの数十年、名古屋大学新1年生用の少人数教育である「基礎セミナー」で「島のフィールドワーク」を行ってきた。その成果が「屋久島の猿害」(1997年度)、「隠岐」(1998年度)、「南の島から - 種子島 -」(2002年度)、「南の島から - 種子島 Part2 -」(2003年度)、「甌島 - 風、海そして人、九州の離島を訪ねて -」(2007年度)、「宝島・口之島調査 - 僕たちが見つけた宝物 -」(2009年度)で報告されている。これに地理学専攻生の有志と作成した「北の島から - 利尻島・礼文島 -」(2006年度)、「いんのしま - 瀬戸内の生活史 -」(2008年度)がある。

こうした島のフィールドワークを通して親交を得た南種子島の大崎蘇市氏の日記、礼文島の小軽米栄氏の日記を解読中である。大崎氏は公式上は農民とされているが、漁師として早朝に魚をとり、商人として魚を売り、職人として竹細工師として生計を営んでいる。日本の農民とは元来こうしたマルチな職を営んでいたのではないかと、気付かせてくれた出会いであった。小軽米氏は80歳を超えても現役の漁師で、タコ取り名人と称されている。ともに数年前にお亡くなりになった。貴重なお話を聞かせていただいたご恩に報いるためにも、日記分析結果を霊前に供えねばと思っている。

第6章の平野・台地でのテーマは無数にあるが、「私の城下町」と題して、尾張名古屋の元禄時代、お畳み奉行朝日文左衛門の妻達(先妻けいと後妻すめ)はどこを誰と歩いていたのか、あるいは美作津山の文化時代、町人の妻達はどこで誰と結婚しどこへ移住したか、などを当時の日記とか人別帳などを読み解いて、明らかにしようとしている。

また「忘れられた日本の景観：島畑」と題して水田の中にぽっかりと浮かぶ畑の存在意義を、棚田ではなく島畑こそが、日本農村の象徴的景観であると主張しようと考えている。水田中心史観の歴史感を、畑作地帯、特に山畑とか焼畑とから、あるいは稲に対してイモを取り上げ否定する常套手段に対して、水田地帯の内部から島畑に注目して疑問を投げかけることが出来るなんて痛快ではないか。柳田国男の稲作指向、それに対して坪井洋文の畑作指向、この両者ともおかしいのではないかというのが溝口の田・畑融合史観である。

いわれなければそのまま通り過ぎてしまう風景。そんな見捨てられた風景に目をやり、熱く語り厚く記述することは、特異なもの異質なものに注目しすぎた古来からの研究方法とは全く異なるが故に、痛快である。夏は雑草に覆われ、秋になってもセイタカアワダチソウに埋る島畑はそんな風景の一つである。一宮市三井地区は名古屋大都市圏内にあるので宅地化が進めば中世から続いてきた島畑景観も後数年でその姿を消してしまうであろう。後世の為にも記録に留めておかねばなるまい。

第7章：複合環境では、第1章～第6章で、地形区分別に考察したものを、二つあるいは三つの関係を重視して「交流」というテーマで議論する。山と海、山と川、山と平野（山村住民と都市住民の交流、軋轢）といった具合である。

こうした異質空間を繋ぐ「道」もこの章で取り上げる。けもの道からハイウェイまで、道は生きもの・人間の生活をつなぎ豊かにしてきた。人が移動し、物を運び、歌を伝えるのが道であり、それは経済の道であり、文化の道でもあった。その道の通るところにムラがあり、道が集まったところにマチができる。故に、マチは異種、異人の集合する場となり、そこで核融合が起こりハイブリッドな新文化が誕生する。それが、又、道を伝って地方に拡散伝播する。

ここでの狙いは、列島を、マチという結節点と道というネットワークによる階層的な地域としてとらえ、その歴史をダイナミックに考察することにある。こうした視点は、マチの民俗・文化を、ムラのそれと比較史的に関連づけてとらえることに通じ、連結路としての道を重視することによって、民俗・文化の伝播、伝承のあり方を探ることになろう。

### Ⅲ. 「地域環境史」—地域の葛藤—

この第2部は「地域環境史」の理論編である。第8章で「等質的な地域論から結節的な地域論へ」を論じ、以下第9章：東西文化論、第10章：中心周辺論、第11章：日本の縮図論、第12章：環境変遷史論、と議論していく（溝口2005）。

第8章：等質的な地域論から結節的な地域論へ。地理学の地域論には、伝統的に、等質地域論と結節地域論がある。等質地域とは、ある広がりを持った地域内が、何らかの意味で等質的性格を備え、それよりも外部の地域とは異質的であるとき、それを基準にして境界が引かれて区分された地域である。地形、気候、生物などの区分はこの等質地域の原理によって行われており、農業・工業・商業、あるいは水田・畑作地域といった人文的地域区分もそれに類するものである。これに対して、結節地域とは、ある地域の中心地とその影響力が機能的に及ぶ範囲をもってひとまとまりとされた地域である。結節地域の機能的統一の代表的なものは都市圏である。これは、都市を拠点とする政治権力あるいは経済力の支配が、地域に投影された姿であり、都市規模の大小に準じて結節地域も階層的構成をなすとされる。

ともすれば郷土を語る際に等質的地域論として風土論が登場し、それが環境決定論的に語られることが多い中で、「縮図論」「中心周辺論」「先進後進論」の語りは興味深いものである。以下、等質的風土論とは異質な郷土の語りについても、光をあてていくこととしたい。

第9章：東西文化論。地域差を重視した等質的地域論を、全国的スケールで語れば、それは東日本対西日本の東西文化論に行き着く。例えば、「見口 vs. 見ヨ、見イ」、「イロリ vs. カマド」、「イエ的社會 vs. ムラの社會」、「落葉広葉樹林帯 vs. 照葉樹林帯」など言葉、民俗、歴史、文化についての東西地域論が大野晋・宮本常一（1981）『東日本と西日本』、網野善彦（1982）『東と西の語る日本の歴史』、大林太良（1990）『東と西 海と山』などの書物に詳しく語られている。こうした東、あるいは西の代表的事象を取り上げて一般化使用とする技法が、前述の県内の地域差語りに用いられていることは言うまでもない。

しかし、筆者は、こうした地域論で見捨てられた少数事例から、新たな地域論の可能性を検討してみたい。事例を馬と牛に絞って、従来の常識であった「東の馬、西の牛」に対して「東牛西馬論」と銘を打つことにする。



①東の牛、東の馬、西の牛として東西の日本の特色をあらわすのは間違いではない。地域の特色を強調しての比較は明快で記憶にとどめやすい。しかし、ここでは、そうした方法をあえてとらず、もう少し地域の全体をみることにしたい。すなわち、地域の代表に挙げられなかった方に目をやり、その重要性を明らかにするのである。

東の馬の世界に、牛はいないのか。まず目にとまったのが山川出版社(1970)の『県史シリーズ』の岩手県の副題に、「未見の運命を担う牛」と牛が登場していたことである。高村光太郎が「岩手の人」を読んだ詩の一節に「岩手の人沈深牛の如し、両角の間に天球をいだいて立つ かの古代エジプトの石牛に似たり、……ニッポンの脊骨岩手の地に 未見の運命を担ふ牛の如き魂の造型を」とあり、それでもって岩手を象徴的に語っている。

南部牛は北上山地の砂鉄を利用してのタタラ製鉄で生産された粗鋼を運ぶほか、三陸海岸から塩や干し魚、昆布などの海産物を内陸部へ、一方、内陸から米、酒、日常生活品を北上山地や三陸海岸へ輸送していた。また、他国用の牛も飼育されていた。安房国や上総国君津郡など房総半島南部へ1～2歳の牝牛を年800頭、越後国の新潟平野へ2歳牝牛700頭、2歳牡牛200頭など各地へ移出されていた。最遠の信州までは600キロあり20日以上を要したといわれている。牛追いの道はまだ明らかにされていないが、物資のみならず文化の道としても重要な役割を果たしていたものと思われる。東日本の馬文化圏内での牛文化について、今後さらに究明する価値は多いにありそうである。

②西の馬。逆に、牛の文化圏での馬の存在はいかなるものであったか、次に考察してみよう。牛は農民的家畜であり、馬は武士の家畜だといわれる。牛が西日本に卓越しているのは、わが国の先進地で、牛車や犁耕が普及していたことに関係がある。畿内では道路の整備が進んだため、牛車の利用が可能となり、また条里制水田が広く分布していた西日本では、牛耕がいち早く発達した。一方、東日本に馬が多かったのは、中世を通じて東国の武士団が騎馬を重要視したことに一因があったとされている。

中西亮太郎(1994)の『徴発物件一覧表』(明治19年)を分析した成果をもとに検討してみよう。氏は郡別にその分布を検討し、西日本で馬耕が卓越する地域として筑後、南宮崎、東日本で牛耕も盛んな房総・伊豆、南部地域が点在していることを指摘した。分析単位を県よりミクロな郡にとったことにより、従来の「東馬西牛」論に再検討をせまる分布が示された点は高く評価



されよう。

近世の地誌をひもとくと、『増補隠州記』貞享5年(1688)では、隠岐49カ村合計で牛3,687頭、馬2,971頭いたことがわかる。隠岐の典型的農業経営に牧畑があり、近世はその全盛期であった。牧畑に欠かせないのが4年に一度の休閑地を利用しての牛馬の放牧である。これらがすべての村で飼育されていた。また、『雲陽大数録』宝暦年間(1751~64)によれば、島根郡(牛766頭、馬22頭)を初めとする10郡において合計、牛11,084頭、馬2,319頭あり、数からみれば牛が馬を圧倒していて、牛の文化圏であることには違いないが、各村、各郡いずれにも馬がそれなりに存在していたことは注目されよう(溝口2002)。

以上の事例が示すように、東西文化論を東の馬、西の牛と類型化して語るのではなく、むしろそれらの融合を語る視点の必要性をここであらためて指摘しておきたい。

第10章：中心周辺論。さて、東と西が融合し、接するところは、日本の中でいかなるところであろうか。その接するところを強調して郷土を語っている県がいくつかある。

内藤正中の語る島根県の歴史をひもといてみよう。「古代社会のころから、大和と北九州との東西文化が交流した接点が出雲であった。経済交流では、出雲は大坂経済圏に属し、石見は北九州圏との関係が強い。自然条件からいっても、日本海を南下する寒流がUターンして北上し、対馬暖流と交わるところが、島根半島の西端あたりとなっている。昔も今も、東と西の文化・経済が交流して接点となっているのが、この島根県である」。この語りは、愛知県出身の筆者にとって意外であり、新鮮であった。というのは、東西文化の接点となる地は日本の中央に位置する愛知県、ないしは中部地方の各県であると思っていたからである。

では、なぜ、日本の中央からみたら周辺に位置する島根県が「東西文化の接するところ」たりうるのか。それは内藤の上述の説明のごとく、納得のいくものである。いいかえれば、日本中すべての県が「東西文化の接するところ」であり、各県内での都市、農村いずれもそれぞれのレベルで東西文化の接しないところはないといってよからう。こうした観点で地域を語ることは、悪く言えば自己中心的かもしれないが、従属論を感じさせない力強さがある。ところが、内藤をはじめとして、県民気質を述べる段になると、歴史家の記述はあまりにも環境決定論的になってしまい論理の整合性を失ってし

まう。島根県の「東西文化の接するところ」に続く件りをしばし引用してみよう。「東西の両方から適当に影響され、適当に引っぱられる。それだけに立場はアイマイにならざるをえなくなる。中途半端ですまされるのである。県民性の欠点として批判されている消極主義、事なかれ主義、権威主義などの背景は、こうした要因からも考えてみるができるのではなからうか。寒流と暖流が交わるという立地条件は、なんでもある、なんでもできる豊かな地域を、自然が作り出してくれたのである。果樹でいえば、リンゴもできるし、夏ミカンもとれる恵まれたところである。豪雪山村総合センターもあれば、椿の花の名所があったりする。気候や自然の条件には、むしろ恵まれているといわなければならない。山の幸、海の幸は豊富。それだけに、そうした自然にはたらきかけて、さらにより多くの富を得ようという積極的な営みに欠けている。無理をしないでもなんとかやっつけていけるという考えである。だから近代化の過程では、後進的性格を濃厚にしてくる。

東西から適当に引っぱられるのは、どの県でもそうである。だからといってどの県の県民性も、アイマイで消極主義で、事なかれ主義で、権威主義とはいえないだろう。豪雪山村センターもあれば椿の名所もあるからといって気候や自然に恵まれているとは決して思わないし、たとえそうだとしても、恵まれているが故に後進的な性格を濃厚にしてくる、とは決していえない。地域を語る際の明快な記述に比べて、県民性を語ることの難しさが露呈されている。

第10章：中心周辺論。私がかって「第三世界論」（溝口 1991）で触れておいたように、いわゆる従属理論における「周辺」（第三世界）は、つねに「中心」（第一世界）に対して従属的で、略奪され、後進であることを構造的に強制されている。これに対して「周辺」には「フロンティア」という意味も付与されている。「中心」から遠方に位置する（僻地である）がゆえにその束縛から自由であり、あらたな時代を創造するダイナミックなエネルギーがそこにはある。周辺地域に「後発性の優位」とか「辺境革命」とよくいわれる場でもある。すなわち、私は「周辺」を地理的位置の上での僻地という受動的な意味とともに能動的な意味をも合せ持った両義の場所として定義しておきたい。そしてその場所は時代によって「僻地」と「フロンティア」の間を振子のように揺れ動くのである。

日本の西端の長崎県、現在は僻地の時代に甘んじてはいるが、江戸時代はフロンティアの時代であった。「近世鎖国時代、長崎がわが国でただ一つの海

外に向けて開かれていた窓であったことはよく知られている。……新しい光は長崎からの感があり、西欧諸国の進んだ文化は、長崎のわずかに開かれた窓を通じて、鎖された日本にとうとうと絶えることなく流れ込んできた」(長崎)。北の端、青森県も「北方世界との交流が育む歴史」(青森)を歌い、辺境の地という位置づけに甘んじてはいない。薩摩、長州、および土佐の3藩が徳川幕府を倒したのは、いずれも外様という立場からの反発という社会的な要因だけではなく、その位置する「周辺」という場所の持つ意味が意外に大きいように思えてならない。近世におけるフロンティアとしての蓄積が大きくものをいったのである。

周辺こそが中心を支えているのだと、むしろ周辺の僻地性をパラドキシカルに、かつ積極的に評価するアメリカの歴史地理学者カレンの論考(Karen 1995)は興味深い。近世に自治政治経済圏を確立していた下伊那の中心都市飯田とその圏域は、近代養蚕立国と化した東京中心の階層的地域構造への転換の中で完全に末端の位置に編入されてしまった。こうした地域が日本には数多く生じたが、それが東京を経済的にアジアの盟主にさせたのだと、日本の近代化過程を「周辺」からするどくみすえている。

第11章：日本の縮図論。地図を読み、地域を比較する作業を行うときの原則は、同じスケールで地図を使う必要がある。同じテーマでもスケールの違う地図によって議論の内容が異なってくる点に注意すべきだと、浮田典良(1984)は『人文地理学概論』で述べている。例えば、日本の稲作を取り上げた場合、①5000万分の1の地図からは、稲作は北海道北部・東部を除いて日本全域でなされていて、日本農業における稲作の普遍性・第一義性が問われる。②500万分の1の地図からは、稲作は平野部に集中しており、山地の土地利用と極端なコントラストが強調される。③50万分の1の地図では、平野部でも沖積平野と洪積台地との違いが浮かび上がり、反当収量の地域差や機械化の進展状況はこの程度のスケールで議論するのが望ましい。④5万分の1地形図では、段丘や扇状地などのこまかな地形との関係、灌漑水路網、裏作の有無などが問題となる。そして⑤5000分の1の地図で検討すれば、水田は一筆づつ描き分けられ、各筆の所有・経営関係などが明らかになる。かくして、稲作の分布や立地を問題にする場合、まずはスケールをはっきりさせておくべきで、異なったスケールでの認識を混同して議論しても無意味であるとしている。

その一方で、スケールが違う地図をならべても、地域論が展開できるので

はないかというのが私の地図スケール論である。例えば、世界地図を眺めて、そこに先進資本主義国（第一世界）と発展途上国（第三世界）があり、植民地時代以後そこには搾取する側（富）とされる側（貧）という差がみいだされる。スケールをかえて第三世界をズームアップすると、そこはすべて貧しいかという、そうではなく産油国を主とした富める国と資源の乏しい俗に言う第四世界に分かれる。では、第四世界はすべて貧しいかという、富める都市と貧しい農村という対立が顕著で、さらに貧しい農村に入ると、そこには地主と小作という搾取の体系が存在している。逆に先進国の例としてアメリカ合衆国をあげると、皆豊かで平等かという、白人と有色人種の差別があり、優位とされている白人の中でもさらにエリート意識の高いWASP（White Anglo-Saxon, Protestant）とそれ以外にわかれる。このように連続的な相似形構造のフラクタルの世界がみいだされるのである。

スケールを越えてミクロをマクロと同スケールで語る構造主義的な方法が縮図論である。その例が奈良県であり、見出しに「大和は全国の縮図」とある。「大和には山あり川あり高原あり平野ありである。ないのは海だけである。畿内先進地区大和といわれるが、近畿随一の秘境をも擁している。交通に和歌山県高野山を迂回するのを便とする吉野郡野迫川村のごときもある。ありとあらゆる地勢をそなえている。まさに日本全国の縮図といえよう」。海がなくても日本の縮図といえるのだから、海を持つ諸県は奈良県以上にミニチュア日本を主張してよからう。「土地が狭いのに人口は多く、日本の縮図のような所である」（香川県）と表現される場合もある。

筆者はかつて隠岐という離島を取りあげ、その地域特性を述べるにあたって、各村落が農業、漁業、林業の三位一体を基本としていたこと、さらには戸口規模のいかにかわらず水田、畑がもうけられ、かつ新田畑開発も行ってたことを示し、その複合的な営力が、スケールの異なるよりミクロな世帯単位でも、あるいはよりマクロな隠岐島全体でも同じようにみられることを述べた（溝口 2002）。隠岐という特殊な位置にある離島においても日本の村落の一般像がみられることを指摘したのであるが、そこでは異質よりも同質を探ることに重点を置いており、そうした方法は「日本の縮図論」に通ずるものといえよう。

第12章：環境変遷史論。空間的な位置関係での中心・周辺論に対して、時間的な優劣が問題になるのが先進・後進地論である。ここでは現在後進地というラベルを張られているところもかつては先進地であった時代も経験して

いること、および見方によっては、何を基準にするかで先進・後進のラベルは張り替えうるということを指摘しておきたい。

日本海諸県は中世渤海など大陸との交流があった時代、および近世北前船の時代は先進地であったといえよう。鳥根県出雲にいたっては古代、神の国として奈良と双璧の地であった。

次に中央から見て、周辺で後進地とみられる佐賀県を例に取ってみよう。佐賀県は後進地か、先進地か。中央に住むものにとって佐賀県は、九州にあって福岡と長崎にはさまれた目立たない県に映る。ゆえに先進地とは思わない。しかし、先進地ということもできる。「佐賀藩は幕末になると、富国強兵ために西洋文化を輸入し、その方面では全国の先進地域になった」（佐賀県）とある。ようするに何を基準にするかが問題であり、何か特筆されるべきものがどの県にも一つはあるはずだから、それを主張すれば、どの県も先進地であると名乗りをあげることができる。そして、同じ基準で地域を論ずる際にも、例えば、考古学上の発見でもあれば、一夜にして先進地になってしまうことさえある。長い歴史の中で、先進地になったり後進地になったりすることがある、という現実を知ることが大切なのである。

辺境であるが故に先進地と主張するのが鹿児島である。その見出しに「日本辺境の先進地」（鹿児島県）とある。薩摩の「ツマ」とは端っこを意味し、「大隅」とは文字通り辺境性を国名にしたものであるとしつつも、古来辺境とは、中央政権からみた辺境であって、そこが行き止まりであることを意味しているわけではなく、そこから異域との交流が自由に広がる世界であったとする。すなわち、中国、南方への南の玄関であり、鉄砲、キリスト教、サツマイモなど新しい文物が真っ先に鹿児島にもたらされたこと、その先進性を強調している。

以上、政治、経済他何かのきっかけで先進、後進が変わりうる可能性がある。地域の変遷を環境の変遷という観点からさらに考察を加えていきたい。

#### IV. 「地域環境史」－自然と人間の対立と調和

第3部では歴史的、総合的な視点から環境史を議論する。まずは人間の自然への侵略史（第13章）を詳論し、第14章で自然からの逆襲史を語り、人間に反省を促す。そして、結論となる第15章で両者の共存の可能性を追求し、提言する。

第13章：開発史. ここでは、1) 干拓, 2) ダム, 電源, 用水開発, 3) 都市開発, 4) 農山村開発(村おこし)を問題とする. 人間が自然を侵略していく背景には、強い者が弱い者を、都市が農村を、先進地が後進地を、そして消費地が生産地を搾取した結果であろう. そういう人間の社会が自然を搾取して、自然のバランスを崩し、自然を破壊したうえに成り立っていることを銘記すべきであろう.

第14章：災害史. ここでは、1) 風水害, 2) 火災, 3) 地震, 4) その他(虫害, 干害, 飢饉, 戦災など)をとりあげ、災害発生メカニズムで自然科学的な要因分析と同時に社会的な要因(人災)を追求し、災害復興の過程を検証する.

第15章：21世紀への提言. 「地域環境史」の最終章としての役割は、自然と人間との関係を重視した新たな地域環境史を創造することであり、環境保全運動、自然保護活動にも目を向ける.

提言の小さな1例として、屋久島を舞台にした「人と猿の緩衝ゾーンの復活」を挙げておきたい.

最初に、猿が人間界に進出してくる以前の土地利用圏を示しておきたい. それは集落の立地する第1次圏(里), 切替畑の点在する第2次圏(里山), そして広葉樹の豊富な第3次圏(山)がバランスよく展開しており、猿と人間の生活圏が棲み分けられていた時代である. しかし、その時代に於いても、人間の自然界への侵略は空間的にかなりの程度進んでいったのである. 中間村の名寄帳によれば、江戸時代中期の享保11年(1726)においては、戸口も少なく山畑(切替畑)を含む耕作地も集落の周辺にかたまっており、かつその面積も微々たるものであった. それが明治14年(1881)になると、居住地域こそさほど拡張しなかったが、人間の生活圏が切替畑の驚異的な増設という形で拡大していったのである. すなわち、この間に第1次圏のみの世界から第2次圏が広域的に誕生し、形成された世界へと変貌していったと言えよう.

その圏構造が、第2次大戦後まもなくして、全く変質してしまった. すなわち、第1次圏においては果樹園の導入、第2次圏の消滅、そして第3次圏の人工林化である. 第1次圏と第3次圏の詳細については稿を改める予定なので、ここでは第2次圏の意義についてふれておきたい. 永田町の芝鉄生氏からの聞き取りによれば、氏は猿害の原因について次のように語っている. 「まあ、猿害の原因はいくつか考えられるんだろうけど. 一つは木の伐採で



### 第3部 社会環境と経済活動

しょう。後もう一つは林業というのが、つまり昔からの林業はね、例えばあちこちの畑と山との中間地点で、炭を焼くとか、なんとかという一つのゾーンがずっと安定してありつづけたわけですね。ところが今はもう、猿と人の住んでいると地帯がくっついてしまって、中間地帯というか、その緩衝地帯がなくなってしまったということですよ、それはね、ポンカン畑がどんどん山の上の方まで上がっていったこととかね。これが、大きな二つの原因でしよう」

まさに、第2次圏の存在が猿が直接山から里へ降りてこない緩衝地帯となっていたのである。そこでは、切替畑が経営されており、炭焼が行われていた。また木炭や民有林運搬のための木馬道がつけられていた。このように人や馬が入れ代り立ち代り出入りして里山を利用していたことが猿を寄せつけなかったことにもなっていたのである。

「猿と人間の葛藤の歴史」という生態史的視点での研究をめざす中で、本稿を位置付けるとするならば、江戸時代および明治時代における土地利用の状況を明確に復元できた点にあらう。切替畑が多数存在していたことは、人間側が自然界に1歩踏出していった原初的な形態の段階とみなすことができよう。そしてその時期に自然界を棲家とする猿が焼畑作物を荒らしにきたとの記録、伝承は残されていない。中間村決議録にみられたその後の主要作物であるカライモ、サトウキビ、米、ポンカンについても、少なくとも昭和39年までは被害にあっていない。

緩衝地帯としての第2次圏（里山）の存在意義を指摘したが、このゾーンを復活させることが、現在猿害対策としてさかんに行われているフェンス作りや、猿射殺などの余り効果のない対策よりも、もっと優れた屋久島の伝統を生かした方策であるように思われる。今後の研究課題として、各時代毎の土地利用の実態を復元する作業を続ける一方、近年における猿害の被害状況を小字図、地籍図および土地利用図をもとにした聞き取りによって明らかにしていくとともに、里山生活圏復活ゾーンの具体的プラン作りをおこなっていききたい。

## V. おわりに

以上の構想による、「地域環境史」という概念が、想定以上に間口と奥行きのあるものであり、その時間と空間との交差軸という視点が多くの研究分野



間で共有できると、確信するに至った。それと同時に、一旦各研究分野の成果を「地域環境史」という視点でフィードバックして考察し、再度統合しなすという作業が必要になることが明らかになった。自然再生と地域環境史は世界遺産や文化庁指定地域に特化することなく我々の身近な地域での環境を守る概念装置である。

こうした地域環境史構想は、2004年度名古屋大学総長裁量経費による「自然再生のための地域環境史創出プロジェクト」で考えたものである。同プロジェクトの研究会と国際シンポジウムでは多数の方々から刺激を受けた。名大地理学講座の高橋誠教授と私の趣旨説明ノートに続いて報告書に寄稿して下さった方々のタイトルを示しておこう。

研究会：沿岸における環境の認識と改変（池口明子）、都市近郊地域における絶滅危惧植物と地域住民との関わり（富田啓介）、明治後期愛知県の治山対策（羽賀祥二）、瀬戸市・海上の自然とくらし（伊藤良吉）、災害と地域社会の対応（秋山昌則）、木曾三川の治水とその問題点（伊藤安男）、国有林野事業と地域社会（大浦由美）、自然再生と市民運動（浅野敏久）、北海道美瑛町における観光地化と景観保全をめぐる課題（関戸明子）、山業採りの社会誌（池口和信）。

国際シンポジウム：里山の環境史と今日の里山観（小林茂）、『山林都市』としての八事丘陵地（堀田典裕）、Landscape into Wilderness, Wilderness into Landscape (Marcella Schmidt)、エコ・コミュニケーション論の観点から見た農林水産業における自然再生の実践（加藤貞通）、中山間地域における自然再生と地域コミュニティ（金料哲）、地理学的視点から見た水辺の自然再生（平井幸宏）、Comparative History of US and Japanese Environmental Movements (Miranda Schreurs)、A Comprehensive Disaster Management Plan for Bangladesh (Islam Khan)。

この報告書がきっかけとなり、その後2回にわたってイギリスの研究者から日欧の環境史セミナーを開催したいとの申し出があり、環境史研究が世界的に展開していくことになった。初回が2007年9月に神戸インスティテュートで開催されたThe Oxford-Kobe Environment Seminarで、オーガナイザーはSt.Andrews大学のT.C.Smout教授、Roskilde大学のP.Holm教授と小生。2回目は2010年9月に名古屋大学で開催されたThe Oxford-Nagoya Environment Seminarで、オーガナイザーはBristol大学のP.Coats教授と小生が務めた。ともにTHE ENVIRONMENTAL HISTORIES OF EUROPE AND JAPANという

### 第3部 社会環境と経済活動

タイトルでの報告書がOxford大学基金で発行された。

後日、第1回のセミナーでの基調講演の原稿を寄せられた米国Georgetown大学のJ.R.McNeill教授の大著：Something New Under the Sun – An Environmental History of the Twentieth-Century Worldの翻訳が名大地理学教室教員の手によりなされ『20世紀環境史』として名古屋大学出版会から2011年に発行されたことを付け加えておきたい。

#### 文献

網野善彦 1982. 『東と西の語る日本の歴史』そしえて。

浮田典良編 1984. 『人文地理学争論』朝倉書店, 10-12.

大野晋・宮本常一他 1981. 『東日本と西日本』日本エディタースクール出版部。

大林太良 1990. 『東と西 海と山』小学館。

Karen Wigen 1995. The Making of a Japanese Periphery, 1750-1920, University of California Press.

中西僚太郎 1994. 明治前期における耕牛・耕馬の分布と牛馬耕普及の地域性について. 歴史地理学169: 2-22.

溝口常俊 1991. 第三世界論. 中藤康俊編『現代の地理学』大明堂: 190-270.

溝口常俊 2002. 『日本近世・近代の畑作地域史研究』名古屋大学出版会。

溝口常俊 2005. 歴史家の郷土語り – 地域論と県民性. 若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史』名古屋大学出版会: 358-387.

山川出版社 1970. 『県史シリーズ (1 北海道の歴史～47沖縄県の歴史)』. あとがき